

【収蔵品紹介】

『華』（大阪園芸会、明治40年創刊）①



『華』第1輯「創刊号」（大阪園芸会、明治40年11月）

刊号から明治43年10月刊の「第四年第十輯」までのうち33冊を収蔵しました。そこで今回は、今号と次号にわたって、当館収蔵品を通して『華』と大阪園芸会に関する基礎的な事実を紹介したいと思います。

明治40年11月刊の創刊号（「第壹輯」）には、巻頭に『華』の編集者・小倉柿花による「大阪園芸会の設立と月刊『華』の発刊に就きて」が掲載されています。

そこでは「物質的文明」に惑わされた「国民生活の墮落、徳性の腐蝕」といった現状への危惧とともに、「世の繁忙と複雑を加ふるに従ひて、吾人が簡素と休息を要するに緊要なる精神的療法として（中略）理想的高潔なる娯楽として、多趣味なる娯楽として、自然を愛する優美心の基点として吾人は園芸を以、其最高なるものと信ず」と、「自然」「さらには「園芸」の意義が説かれています。

さらに小倉は「園芸美」が「人類品性度が設けられていました。「発起人」のうち大阪盆栽界の草分けとされる三樹園や梅丈園の名前はよく知られていますが、会の中心的役割を担ったのは、前述の松井吉助でした。会の事務所は吉助園に置かれており、創刊の翌年には発行者兼編集者となって『華』の刊行を一手に引き受けるようになります。元禄年間に創業した吉助園は、代々「吉助」を名乗って牡丹を得意とし（「吉助牡丹」）、嘉永期頃には京阪の植木屋において唯一、江戸の染井や巢鴨の植木屋に劣らないとの評判を得ていました（飛田範夫「大坂の植

の涵養に多大の潜勢力」があり、「夫れ花弁を愛する程度の高下は其国の文野を卜知するに足るべく、其国民の最高の美德を發揮するに緊要なる方法として、吾人は我が国民にこの観念を一層深く感ぜしめんと欲するに切なるもの、之れ本会設立の微衷にして機関雑誌『華』の発行も亦、之れが趣味普及に外なきなり」と述べています。

これに続いて大阪園芸会の「発起人」の一人で『華』の発行者である松井吉助の『華』発刊の辞」では、最近「我邦に於て漸く園芸を重視するに到り、識者は其趣味を説き、其発展を促すに切なるもの亦偶然にあらざるなり。園芸雑誌華の機運に遭遇して生る、是れ又時代の産児なり、即ち時代の要求に外なきなり」として、「本誌は大方識者の指導を仰け、汎く園芸美に関する趣味の普及、嗜好の鼓吹を努むにあり」とされています。

以上の小倉と松井の言からは、大阪園芸会の発会と『華』の創刊が、明治40年当時の社会状況と、その中における「園芸」の社会的位置をふまえたものであったことがうかがえます。当時の「園芸」を取り巻く状況は、明治30年代に入っ

てから「園芸」を冠した雑誌が次々に創刊され（丸山宏「明治期における朝顔雑誌の創刊とその展開」『造園雑誌』57-5）、また明治40年になって「園芸」という言葉が現在の意味（花卉などの栽培・技術）で辞典に掲載されるようになったとされています（水島かな江「近代における園芸領域への因らんの浸透」『日本家政学会誌』59-2）。『華』の創刊は「園芸」が社会的に定着しはじめた時期と軌を一にしており、松井が述べるように、確かにそれは「時代の産児」であったと言えるでしょう。

大阪園芸会の組織は、大阪市内の盆栽園で構成された「発起人」（発会時は13名（表参照））によって運営され、会員制

大阪園芸会の組織は、大阪市内の盆栽園で構成された「発起人」（発会時は13名（表参照））によって運営され、会員制

表. 大阪園芸会の「発起人」
(明治40年11月時点)

一樹園	大阪市北区梅田停車場前
梅丈園	大阪市北区老松町大路次
梅市園	大阪市南区恵美須町
桃李園	大阪市南区玉屋町
巖樹園	大阪市南区今宮
松井吉助	大阪市南区高津
小林園	大阪市南区東高津南ノ丁
赤松園	大阪市西区北堀通4丁目
三樹園	大阪市北区野崎500番地
三湖園	大阪市北区西堀川町86番地
青樹園	大阪市南区恵美須町
静香園	大阪市南区安堂寺町4丁目
翠香園	大阪市北区曾根崎上1丁目

※『華』第1輯より



松井吉助氏所藏

丹社塞（寸八尺一高）松
『華』第2年第1輯（明治41年1月）掲載の
松井吉助の陳列風景（松・寒牡丹）

木屋と花屋」『ランドスケープ研究』63-5）。歴史ある名園の吉助園ですが、明治末期に廃業したこともあり、江戸時代以降の同園については不明な点が多く、この点で『華』は明治の吉助園の様子を具体的に知ることができる貴重な資料になります。

大阪園芸会の目的は、創刊号掲載の規則に「盆栽、花卉、果物、蔬菜、観賞植物及築庭等一切の園芸に関する学術並に業務の発達を図り、汎く園芸趣味の普及に努むるにあり」と明記されており、事業としては『華』刊行のほかに「陳列会」も開催されました。明治41年3月からは春秋二期の大会のほかに「定期陳列会」を吉助園で毎月開催するようになり、す（『華』第2年第5輯）。この定期陳列会では、「地方会員」には写真での出品が許可されていました。大阪園芸会の会員は発足間もない明治40年12月31日時点で245名を数え、その内訳は全国18府県と韓国にまたがっています（『華』第2年第1輯）。大阪園芸会は大阪に軸足を置いて発会されましたが、その内実は全国的な広がりを見せていたのです。

（当館学芸員 林進一郎）